

流祖三世清水道竿を訪ねて（その一）

―入門して学んだこと―



仙台藩茶道石州流清水派

小坂力雄

一 はじめに

私は、入門当時には本田道赫教授から茶道の基本の指導を受け、大泉道紀師匠（宗家十一世大泉道鑑奥方）のもとで稽古に励んでいる。私が仙台藩茶道石州流清水派（以下石州流清水派と略）に入門したのは、三年近く前の夏の頃であった。加齢による体力の低下を日頃実感し、職業生活を終了させてのことだった。仕事を離れば自由な時間が多くなるが、その反面、運動不足と認知症に陥る危険性が増すと思われた。そこでこの弊害を避けるためと楽しみのため、日本舞踊と昔やっていた社交ダンスに加え、全く未経験の茶道をやるうと思立った。しかし、膝の古傷を考えると、日本舞踊と社交ダンスは長続きはしないことに気

付き、茶道に決まったのである。しかし、茶道では千利休、裏千家、表千家の言葉を知っているくらいであった。これらは、学校の社会科で覚えたのかもしれないが、半世紀程も昔のことと確かな記憶はない。

石州流清水派の門を叩いたのは、入門の半年前から趣味で始めていた「武家・伊達氏の歴史探訪」に起因する。仙台藩六十二万石を創ったのは、戦国末期の名将伊達政宗で、その居城が仙台市の青葉山にあった。仙台市に居住するようになって四分の一世紀、何か仙台の地に親しみを覚えたからである。

二 入門して驚いたこと

茶道の世界を知らない私には、入門して驚くことが沢山あった。特に、「師匠が女性であったこと」、「作法が優美・流麗・寡黙であること」、「流派によって作法所作がかなり異なること」である。

（一）女性師匠

武家、武士イコール男のイメージの私は、仙台藩の大名茶は武士の男が担っていたのだろうし、この茶道を受け継

いできたという現在の師匠も当然男が担い、指導しているものと想像していた。ところが、入門してみると師匠は女性であり、門人も女性の比率が圧倒的に高かった。この驚きは、武家時代といえども、女性も茶道をしていたのではないだろうかとの思いにつながっていき、それからは機を見て調べている。

(2) 作法の優美・流麗・寡黙

入門して四ヵ月少し経った平成二十六年十一月、仙台市内を一望でき、広瀬川により削られてできた峯に位置する料亭「東洋館」の茶室で、門人だけが集まり定例になっているという「秋の茶会」が開かれた。生まれて初めての茶会だったので不安もあったが出席した。

五時間近くにも及んだ茶会の出席者は、十五人くらいだった。客一同は寄合の和室に集まり、何か新鮮で恭しく、どこか懐かしさの漂う雰囲気の中で、互いに挨拶を交わす。そして薄味の茶碗の湯を飲み、しばし時を過ごす。程なく草履で庭に出、手水を使い、茶室に入る。私の席は、新参者のためであろうか、両隣りの席には教授資格の女性門人が座った。この二人の所作を真似て茶会に臨めばよいとの

配慮だったのであろうか。

炭手前、懐石料理の一品ずつの運び込み、日本酒、和菓子、濃茶手前そして中立。銅鑼の音で再び茶室に入る。干菓子それに薄茶手前と続く本格的な「昼の茶事」だった。

ここで驚いたのは、この長時間に及ぶ茶事を女性門人達が、殆んど音もなく無言で、水の流れのように、しかも的確に進めていく様であった。そうして女性門人達の作法所作の優美流麗なことには息を飲んだ。まるで高貴な王朝絵巻を見ているような気分だった。だから時間の経つことなどはすっかり忘れてしまっていた。これが、昔の藩主がこよなく愛した大名茶・石州流清水派の流儀だったのだろうとの実感が沸き、感懐もひとしおだった。この秋の茶会と同様な王朝絵巻を見るようなすばらしい体験は、二ヵ月経った翌年の石州流清水派の「初釜」でもすることになった。この上もなく優雅で、快適な至福の時間であったことを、今日のできごとのようにはつきりと覚えている。

(3) 派による作法所作の違い

水戸市の全国大会

初釜から四ヵ月後の平成二十七年五月三十〜三十一日、

石州流の全国大会が水戸市で開催され参加した。もちろん初めての貴重な経験であった。この大会では、水戸何陋会の温くきめ細かな応対が何よりも嬉しかった。特に私共仙台一行のために応対・案内に当たって下さった飯田亨氏の明瞭的確な案内と説明、水戸の郷土を愛する心とその優しい人柄が伝ってくる応対、それに山中晴美氏の物静かで見立たぬきめ細かなお世話には心温り、実に感謝に絶えない思いだった。また、茶会で出された「八女」の生きた植物のような苦味の薄茶の美味さは格別だった。

ところで、この大会に参加しても私には驚くことがあった。それは、そこで拝見した手前・作法が自分が習得に努めているそれとは大きく異っているように見えたことである。特に、柄杓を釜の高い位置から釜内に入れて湯を汲む作法は、印象深かった。極端な言い方をすれば、同じなのは服紗を右腰に付けることくらいではないかと思った。もちろん、派が異れば作法所作の違うのは当然のことである。違うからこそ派が異っているのだし、まして良し悪しを考える性質のことでもないことも充分承知している。しかし、とにかく大変驚いてしまった。

仙台に帰って

この驚きは、仙台に帰ってから頭から離れなかった。派による作法の違いは、どこから来るのか。この思いは、自分の所属する流派の成立を調べる契機となり、これを実行してみたのである。

調べの第一は、仙台市博物館に通って仙台藩茶道の文献を読み、展示されている茶道具を見ることからであった。

調べの第二は、先代の十世大泉道鑑先生が、仙台藩茶道の歴史学的資料を詳細に調査研究して出版した『清水動閑 註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』の「仙台藩茶道の歴史」の箇所の内容を理解することである。その結果、石州流清水派の流祖が三世の清水道竿であるとの確信が持てるようになった。

調べの第三は、三世道竿の事跡調べである。この調査では、仙台藩の分家支藩である岩出山伊達藩のあった宮城県北西部の大崎市岩出山にある同市の文化財課職員・菊地優子氏と中村一彦氏に一年近くも、三世道竿の作った国史跡名勝に指定されている旧有備館庭園とその茶亭および三世道竿が試作したと伝えられている庭園について教示をいただいた。また、三世道竿による岩出山藩茶道に対する指導・

目録伝授に関する古文書資料の解説・教示を受けるため、訪問して直接聴き取りあるいは、電話・FAXでの聴き取りによって指導をしていただいた。私にとつては、古文書に触れるのは生まれて初めての経験であったが、何より異分野の専門家の異なる視点からの歴史学的思考法を教えていただいたことがとても嬉しく、しかも極めて有益であった。

これらの調査から分かってきたことは、三世道竿は、仙台藩の茶道頭として藩主綱村に茶道指南をしたばかりでなく、藩の公式茶道行事の任に当たり、支藩の茶道指導、庭園の作庭、さらに他藩の人々に対する茶道の指導を広く勤めた大人物であったことである。これらは、石州流の流祖・片桐石州および「綺麗さび」の遠州流の流祖・小堀遠州の大茶人と共通する特質である。

三 仙台藩の茶道―藩主と茶道頭

一言で仙台藩茶道といっても、仙台藩の治政は二七〇年の永きにおよび、藩主は十三人を、茶道頭は、八世をそれぞれ数えた。一方、この間の流派は三種であり、時系列で見ると以下のようになる。

(1) 初代藩主伊達政宗(一五六七―一六三六)の時代流派は織部流であると考えられる。茶道頭には、一世清水道閑(一五七九―一六四八)が任命された。政宗は、三十四才で仙台藩を開いたが、その前十二年間は岩出山城主であった。しかし、岩出山に実際に居住した期間はわずか数カ月で、殆んどは京都を中心に滞在していた。この京都時代に、徳川将軍家の茶道師範を務めた古田織部や遠州等の代表的な茶人と交流していた。また、仙台藩開府に伴わない、織部の高弟だった一世道閑を京都から、当時では破格の五〇〇石の待遇で招聘し、初代の茶道頭とした。これが仙台藩茶道の嚆矢である。

政宗は若くして茶道の才を遺憾なく発揮したといわれているだけではなく、和歌、漢詩、能楽、香道、料理にも名人、達人の才を示している。さらに、政宗の軍事的・政治的手腕は抜群で、豊臣秀吉や徳川家康と対峙して戦国乱世を生き抜いた。名将政宗は、まさに文武両道を体現した人物だった。

(2) 二台藩主伊達忠宗(一五九九―一六五八)の時代忠宗の時代、藩の茶道流派は石州流に変わる基礎作りが

行われたといえる。茶道頭は、一世道閑の外孫の二世清水動閑（一六一四〜一六九一）である。徳川將軍家の流派が遠州流から石州流に変わったことを忠宗が重視したことによると考えられる。このような時代の流れに対応するため忠宗は、二世動閑を石州のもとに十三年間弟子入りさせた。二世動閑は、石州流を完全に体得して仙台藩に帰任し、茶道頭に就任したため、藩の茶道流派が織部流から石州流に変わる基礎が固まったと思われる。

(3) 四代藩主伊達綱村（一六五九〜一七一九）の時代、三代藩主の伊達綱宗は、お家騒動（寛文事件）のため、藩主在位期間はわずか二年間で終った。このため実子の綱村が数え年二歳で四代藩主となり、一方茶道頭は、二世動閑と三世道竿が務め、この時代に茶道流派は、三世道竿によって創意工夫された石州流清水派が確立した。

綱村は、その気性が性急で何事にも執着心を示す性格だった。特に儒学および仏教の黄檗宗に凝り、仙台城の東、茂ヶ崎山に本山規模の寺院を自ら鋤入れして建立し、そこには三百人以上の僧がかかえられていた。また綱村は、茶道にも並はずれた執念を燃やし続け、十三年間で千二百回

以上も茶会を開いている。これによって、藩財政に莫大な負担が強いられることになった。

一方、この綱村は、茶道頭を二世動閑の後の茶道頭には実子の清水静井（後に快閑と改める）ではなく、二世動閑の高弟であり自らの家臣である馬場道斎を任命し、その名を清水道竿に改めさせた。これは、馬場道斎の茶道の才能が実子の静井より格段に勝り、しかも一門のなかで傑出していたためである。茶道に執心し、自ら茶道に精進を重ねた傑出した数奇大名だった綱村は、血縁よりもその実力で後継の茶道頭を決めたのは特筆すべきことで、以後このようなことが石州流清水派の特徴のひとつとなった。なお、静井には、主として医術をもって仙台藩に奉公するよう命じている。

三世道竿は、藩主綱村の命で松浦鎮信、さらに藤林宗源に師事して修行を重ねた。その後、自ら創意工夫を加えて意して石州流清水派を形成、完成させた。これが、仙台藩茶道における正式な流派の誕生である。

上に述べた経過をたどり、仙台藩の公式な茶道は、石州流清水派となった。その後、藩政が終焉し明治になってからも、名は「清水」から、「落合」、「大泉」とその名字は変わっ

たが、この石州流清水派の茶道は藩政時代と変わらず正しく継承され、現在に至っている。以上述べたことが、茶道頭の三世道竿が石州流清水派の流祖たる由縁であると確信している。

なお、この仙台藩の正式な茶道石州流清水派では、茶道頭を引き継ぐ際に、その印として『清水動閑註解石州流三百箇條』と『動閑茶湯書』、『渋紙庵之記』の掛軸および『片桐石見守宗閑居士像』の三つの文献（資料）を前茶道頭から後継の茶道頭になる者に引き渡されている。また現在の宗家は、先代の宗家同様政宗の命日五月二十四日の法要で、政宗の眠る御廟「瑞鳳殿」で御霊に献茶を行なっている。この献茶式に臨む私は、御霊に感謝の念で手を合せ、同時に仙台藩茶道石州流清水派が現在に生きていることを強く実感するのである。

四 おわりに

私が、水戸市の全国大会で驚いた「流派による作法の違い」から出発して石州流清水派の歴史を調べた結果、この作法の違いは、藩主のおかれた時代と藩主の性向、そして実際に茶道を担う茶道頭の資質に負うということが感じら

れた。しかし、私のこの探索研究は始まったばかりで、「象のしっぽを見ている」のではないかと危惧している。従って、今後も気の向くまま、心の赴くところに軸を置き、この探索研究を続けていく決意を新たに行っている。

参考文献（五十音順）

『阿部家文書二二八番諸芸伝授書上』

『関』（第十八号）全日本石州流茶道協会

平成二十年

『関』（第十九号）全日本石州流茶道協会

平成二十一年

『関』（第二十号）全日本石州流茶道協会

平成二十二年

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』十世道鑑

大泉淑子

丸善出版サービスセンター 昭和五十五年